

越前鳥の子紙の工程

①雁皮の刈り取り

生木のまま樹皮をはぎ取る。
(敦賀半島にて野生の雁皮を採取)



②雁皮の皮こき

採取の際に取り切れなかった黒皮や節を小刀等で取り除く。



③灰汁だし

黒皮をはいだ雁皮を水に浸ける。

④煮熟

アルカリ性溶液を入れた窯に、灰汁出した雁皮を入れて煮る。

煮熟後は窯の中で一晩蒸らし、その後、灰汁が抜けるまで水にさらす。

アルカリ性溶液で煮熟することで、繊維をほぐれやすくすると同時に、セルロースやヘミセルロース、リグニン、ペクチンなどの不純物を水に溶ける物質に代えて、繊維素だけを抽出させる。

アルカリ性溶液としては、古くから草木灰が用いられてきた

草木灰の灰汁には、主にヨモギ、カシなどの灰が用いられる。灰汁桶（アクタラシ）の底に杉葉を敷きつめ、籾殻、草木灰、杉葉の順に入れ、沸騰したお湯を少しずつ注いで灰汁を抽出する。



⑤塵より

灰汁だしをした雁皮に残る塵（繊維の損傷部や不純物）を手作業で丁寧に取り除く。



⑥叩解

塵よりを終えた雁皮を、叩き棒で念入りに叩き、繊維をほぐす。明治20年頃に木材パルプを使うようになると、叩解にビーターが導入された。

⑦紙漉き

漉き舟の中に紙料を入れ、ネリを加えて「たて木」でたてる（かきまぜて調整する）。紙は流し漉きで漉く。

漉き桁に漉き簀をはめ、簀の糸目が出ないように、簀の上に紗を載せる。

最初に紙料を浅く汲み、簀全体に薄く平均的にゆきわたらせる。2度目からはやや深く汲み、紙料が均等に広がるよう漉き桁を前後左右に揺り動かし、求める厚さになるまで何回も繰り返す。

適当な厚さになったら、簀の上に残っている紙料を桁の先から勢いよく流し捨て、紙料のかたまりや塵など、簀の上に浮かび出たものを流し捨てる。吟味した紙の場合は、捨て水（化粧水）といい、さらにもう一度浅く汲んだ紙料を勢いよく流して紙面をきれいに整える。

漉き上げた紙（湿紙）は、紙床板の上に一枚ずつ重ねていく。互いの紙がくっつかないように、紙と紙の間に布を挟む。

ネリは手桶の中に木槌でたたきだした「キネリ」（トロロアオイの根）、「皮ネリ」（ノリウツギの皮）を水漬けしてかき混ぜ、そうけに移して、粘液をたらす。粘液はさらに木綿布で濾過して不純物を除去する。

ネリは水中の紙料をよく分散させ、漉くときに水漏れを遅くするため、簀の上の繊維を絡ませる効果があると共に、漉き舟の紙料の沈殿が遅くなる。

⑧乾燥

一晚置いた後、圧搾機にかけて脱水し、刷毛を使ってイチョウの板に貼り付け、天日もしくは室（乾燥室）で乾燥させる。

